

# 10 被災地の 復旧に駆ける

## —災害緊急援助—



モロッコ洪水災害に対する緊急援助(物資供与)

### 緊急援助体制の整備

#### 被災地の要請により活動

JICAの緊急援助活動は、開発途上地域などにおいて大規模な災害が発生した場合に、被災国政府または国際機関からの要請に応じて、国際緊急援助隊(JDR: Japan Disaster Relief Team)の派遣や緊急援助物資を供与するものです。

災害に対する緊急援助活動は、1970年代後半、カンボジア難民を救済するための医療チームを派遣したことに始まります。その後、1987年9月、「国際緊急援助隊の派遣に関する法律」(以下「JDR法」)が公布・施行され、救助チームおよび専門家チームの派遣体制が整備されるとともに、国際協力事業団法の一部改正により緊急援助物資を加えた日本の総合的な緊急援助体制が確立されました。

さらに、1992年6月、JDR法が一部改正され、災害の規模が大きく大規模な援助が必要となった場合や、被災地において自給自足的な活動を行う必要

がある場合には、外務大臣と防衛庁長官との協議を経たうえで、自衛隊を派遣することができるようになりました。

#### 国際緊急援助活動

国際緊急援助活動は、人的支援として救助チーム、医療チーム、専門家チーム、自衛隊部隊の派遣を、また物的支援として緊急援助物資の供与を実施します。

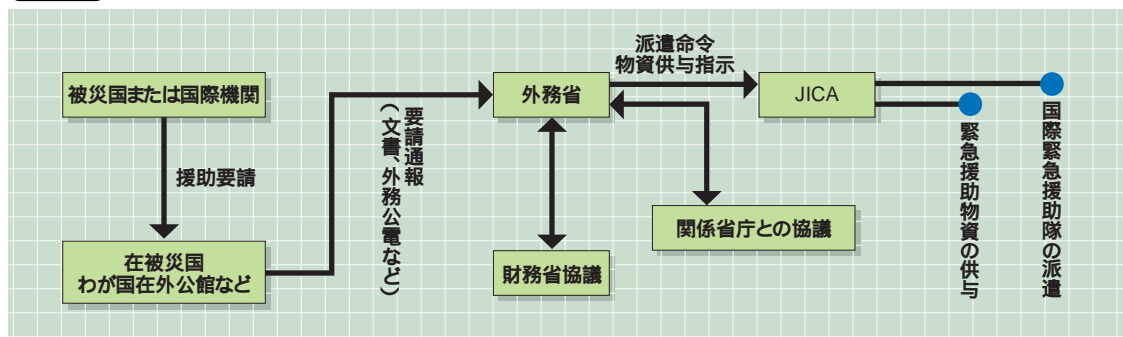
##### 1. 救助チーム

救助チームは、行方不明者の搜索、被災者の救出や応急措置、安全な場所への移送をおもな任務としています。警察庁、消防庁、海上保安庁の救助隊員などで編成され、被災国からの要請後、24時間以内に日本を出発することを目標としています。

##### 2. 医療チーム

医療チームは、被災者の診療または診療の補助を行い、必要に応じて疾病の感染予防や蔓延防止のための活動を行います。このチームは、JICAの国際

図表3-12 災害緊急援助決定の仕組み(資金援助を除く)



緊急援助隊事務局にあらかじめ登録された医師、看護師、薬剤師、調整員などから編成されます。

医療チームは、JDR法が公布される前から活動していた「国際救急医療チーム(JMTDR)」を前身として引き継いでいます。2003年4月時点の登録者数は、医師215人、看護師289人、薬剤師26人、医療調整員35人、業務調整員106人で、合計671人となっています。

### 3. 専門家チーム

専門家チームは、災害に対する応急対策と復旧活動の指導や助言を行います。チームは、災害の種類に応じて、関係省庁から推薦された技術者や研究者などで構成されます。

### 4. 自衛隊部隊

大規模な災害が発生し、特に必要があると認められるときに自衛隊部隊を派遣します。自衛隊部隊は、緊急援助活動(救助活動、医療活動、災害応急対策、災害復旧)や船舶、航空機を用いた輸送活動、ヘリコプターによる空輸活動、浄水装置を用いた浄水活動を対象業務としています。

### 5. 物資供与

被災者の救援や復旧活動を支援するため、被災地

に毛布、テント、浄水器、発電機、医薬品などの援助物資を供与しています。これらの物資を迅速、確実、かつ、大量に供与するためには、事前に調達・備蓄し、適切に管理する必要があります。このため、備蓄倉庫を海外3カ所(シンガポール、英国および米国)に設置しています。

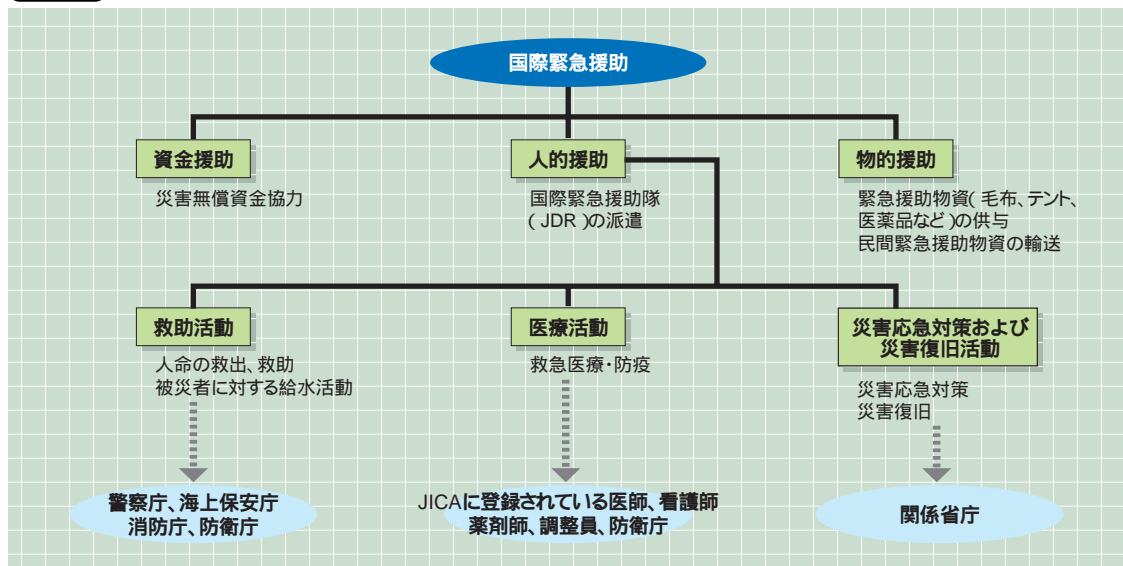
また、被災国の援助要請により日本政府が緊急援助物資を供与しても、さらに追加の援助物資が要請されるような大規模な災害が起こることがあります。こうした場合に、JICAは、マスコミなどを通じて地方自治体、民間団体、個人から援助物資を募り、これらの物資の国内での集荷、被災国への輸送などの経費を負担します。こうした援助物資は日本大使館を通じて、原則として被災国政府へ贈与します。

## 援助効果を高めるために

### ■ 研修・訓練の実施

海外での救援活動は、日本とは習慣、言語など、状況が異なる不慣れな環境のなかで行うことになります。こうしたなかで救援活動が効率的、効果的に遂行できるよう、救助チームや医療チームの関係者

図表3-13 日本の国際緊急援助体制



を対象として、種々の研修、訓練を実施しています。2002年度は、あらたな取り組みとして医療チームの研修において模擬野営を導入し、救助チームの訓練において医療班、救助犬との連携訓練を実施しました。

## ■ 評価ガイドラインの策定

緊急援助事業の実態について国民への説明責任を果たすとともに、いっそうの事業改善を進めるため救助チームと医療チームの活動について評価ガイドラインを策定しました。これにより、今後派遣されるチームについてはガイドラインに基づいて評価を行い、その結果を公表し、教訓や提言にそって業務改

善に取り組みます。

## ■ 国際機関やNGOとの連携強化

大きな災害の現場では、一般に各国の援助関係機関や複数の国際機関が支援活動を展開します。このため、国連人道援助問題調整事務所(UNOCHA)が中心となり、災害援助活動を調整するしくみづくりを進めています。JICAもそのような動きに合わせ、災害現場での迅速な活動の実施に資するために、各関係機関と積極的に連携を進めています。

また、被災地で活動している日本のNGOと被災地の状況に応じ臨機応変に連携し、より効果的な活動を展開するよう努めています。

# Front Line

## アルジェリア 大地震へ国際緊急援助隊派遣

### トルコとの連携で生存者救出に成功

災害緊急援助

#### M6.7の大地震発生

2003年5月23日、救助活動を行っていた隊員の「こもった声がある」というひと言をきっかけに、JICAの国際緊急援助隊は1999年9月のトルコ地震以来の生存者救出に成功しました。

現地時間の5月21日午後7時44分、アルジェリア北部を中心に、マグニチュード6.7の大地震が発生。日本政府は地震発生後約12時間で国際緊急援助隊の派遣を決定、警察庁、消防庁、海上保安庁、外務省、JICA職員などからなる救助チームが現地へ飛びました。

#### 生存者発見

23日午前11時に首都アルジェに到着した日本の先遣隊はアルジェ東部のブーメルデス県の災害対策本部などを回った後、震源地にほど近いゼンムリ市の海沿いのホテル倒壊現場に到着しました。

6階建てのホテルの瓦礫のなかには従業員とホテルのレストラン利用客あわせて5人が生き埋めになったとの情

報がありました。しかし、到着当時、現場で繰り広げられていたのは、目を覆うような光景。地元住民らが自前の重機で、瓦礫の山を上から崩すように作業していたのです。

「あれでは生きている者も死んでしまう」。午後7時半過ぎ、日本チームの隊員が中心となり、生存者探索活動が始まりました。

途中から合流したトルコチームと作業を交替しようとしたそのとき、1人の隊員が人の声に気づきました。こもった声。「聞こえる、生きてる」。救出に向けて、作業は一気に進みました。

#### 感動的な救出劇

作業開始から約2時間。瓦礫のなかに、ぼっかりと空間ができ、そこから、生存者の姿が垣間見えました。ペットボトルの水を与え、トルコ人医師が点滴のために穴にもぐります。日本チームは担架を用意して待機しました。そして、地震発生から実に丸2日以上も経過した23日の午後11時59分、男



生存者を救出する日本とトルコの救助チーム

性を救出することができたのです。

日本チームの作業は休むことなく続けられ、24日と25日には、あわせて5人の遺体を瓦礫の山から発見しました。作業終了後には、倒壊したホテルのオーナーから日本チームの活動に対する感謝状も贈られ、集まっていた近隣住民からも大きな拍手が起こりました。

隊員1人ひとりがプロの技術と経験を発揮した救助活動をとおして、地元の人々にも、日本チームの「人を救いたい」という思いが確かに伝わったようでした。

(国際緊急援助隊事務局)